メアリー・エレン・ビュート後期抽象映画の作品分析とその今日的再評価の試み

大阪芸術大学　映像学科　専任講師　大橋　勝

メアリー・エレン・ビュート／Mary Ellen Bute（1906-1983、アメリカの映画作家、美術家）は、自らの音楽鑑賞に伴う内的イメージを視覚的に表現するという目標のため、様々なメディア（絵画、照明、カラーオルガンなど）を遍歴したのち、サウンド映画に到達する。この間、レフ・テルミンやトマス・ウィルフレッドらとの重要な出会いがあり、特にロシアの科学者・作曲家ヨーゼフ・シリンガーの大きな影響を受けている。

ビュートの抽象映画作品は 15 本あるが、第 8 作『タランテラ』（1941）と第 9 作『ポルカグラフ』（1947）の間に大きなブランクがある。これは戦争やビュート自身の出産と子育て、体調等の要因が考えられるが、この間作品の傾向に変化が認められる。応募者は、この変化をブリコラージュ的制作方法の獲得と考え、作品分析を通じてそれらを明らかにすることを試み、この時期の特に重要な作品である『カラー・ラプソディ』（1948）、『ポルカグラフ』（1947）、『アブストロニク』（1952）の 3 作を対象とした。

ブリコラージュ（bricolage）という語は「繕う」「ごまかす」を意味するフランス語動詞 ”bricoler”に由来し、「寄せ集め」「ありもので間に合わせる」「器用仕事」などと訳される。あり合わせの手段・道具・材料を用いてやりくりするものづくりである。アートにおいては、ブリコラージュ的方法論と言えるものは、ダダ、シュルレアリスムにおけるコラージュ、クルト・シュヴィッタースのメルツ、ロバート・ラウシェンバーグのコンバイン・ペインティング、アルテ・ポーヴェラ、ジャンクアートなど枚挙にいとまがない。更に、マルセル・デュシャンの「レディメイド」もこの文脈から捉え直す事が可能である。

Polka Graph（ポルカグラフ、1947）はドミトーリ・ショスタコーヴィチの『黄金時代』の「ポルカ」を視覚化した作品で、4 分 30 秒の短編である。サウンドトラック（音楽）と、その抑揚に同期した抽象アニメーションで構成されている。この作品には、ビュート自身の作画によるハードエッジのグラフィックス・アニメーションと、ノーマン・マクラレンのオーガニックなダイレクト・アニメーションが交錯する。注目すべきは、ここで用いられている動画の一部が過去の作品『タランテラ』（1941）から流用されているという点である。

Color Rhapsody（カラー・ラプソディ、色彩狂詩曲、1948）はフランツ・リストの『ハンガリー狂詩曲第二』をサウンドトラックとした 6 分の短編アニメーションである。打ち上げ花火の実写映像（撮影は映画作家、映画カメラマン、ヒラリー・ハリス）を光学的に着色したものを背景に、ビュートのグラフィカルなアニメーションが展開する。このアニメーションも過去作品の動画が流用されている。この作品の外観はアニメーション作品であるが、制作の主たる作業は編集と再構成である。

Abstoronic（アブストロニク、1952）は二部構成で、アーロン・コープランドの「ホーダウン」とドン・ギリスの「ランチハウス・パーティ」を主題とする、全体で 7 分の短編映画である。この作品はビュートが「アブストロニクス」と命名した特殊技法が用いられている。当時製品化されたオシロスコープを用い、電子的な抽象パターンの動きをコレオグラフィに見立て表現に応用するという手法である。ビュート自身の描いた抽象絵画を背景に、「アブストロニクス」による抽象パターンの運動が音楽に同期して展開する。

これら作品に共通するのは、レヴェルは異なるが様々な来歴から調達された素材を統合、再構成する事で出来上がっているということで、その根底にはブリコラージュ的思考が共通してあると考える。

主要参考文献

Kit Smyth Basquin. *Mary Ellen Bute: Pioneer Animator*, John Libbey Publishing, 2020

Betancourt, Michael. *The History of Motion Graphics*, Wildeside Press, 2013

野生の思考、クロード・レヴィ=ストロース著、大橋保夫訳、みすず書房、1976